



6 7 8 9 2 6 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2 7

始



贖價

エバの譯者 明石順三

曰、汝神は唯一なり。また
神と人との間の中保も唯一
にして、人なるキリスト・
イエス是なり。彼は己を犠
牲へり。時到りて讐せら
る。我れが立てられてう
れて宣傳者となり、使徒とな
れり。(訳テモテ前書二章五十七節)

神エホバは人間の救り主に在す。エホバは、
救の希望のため確実なる基礎を置きて、此
の事を人間に顯示し給ふ。曰、そは置る給ひ
セ其従の外に、誰も亘基礎を置うること能はざ
リはなり。この基礎は即ちイエス・キリストなり(シ
ント聖書三章十二節)。曰、これ即ち汝等エホバの
棄てし所の石、家の隅の首石となれるものなり。
此の分別は救ある事なし。されば天下の人の中れ

我等の依り頼みて救ひるべき他の名を賜はざ
りばなり(使徒行伝四章十三節)。(救の

然うば神は何故に罪ある人間のために此の基
礎を置ゑ給ひ一か。そりは即ちエホバ御自身
の聖名の證明のためであつた。惡魔の神に対する
挑戦は、エホバの聖名の最高至上権を問題と
した。不完全なる人間が、その生末遺傳せらる
不完全性より解放されて、神に対して己が貞
節を立證する事は、エホバの聖名の證明となる
り、惡魔の主張する所を打ち破つて、彼の挑
戦に敗北を喫せしむることとなる。アダムの上に
下されたる宣託は正當なる判決であつた。此
の判決は永久に立つのである。アダムの子孫は
彼より遺傳せる罪の故によつて全部が罪人であ
る。神は他の者がアダムの子孫を買ひ取るこ
とを許し給ふ。而て神エホバを信じ、此の買
受主を信じ、之に服従する者は神に対する
己の贞節を立證する事は、即ち神の聖名の證明となるのである。神は人間の救のための基礎
を置ゑ給ひ一事によつて、罪人に対する其の御
憐憫と御仁慈を実行し給ふ。然うば此の
人間の救のための基礎は如何にて置ゑらる。

76W10681



か。それは「人なるイエス」をして、人類即ち「アダム」の子孫を買ひ取りうるために必要な「價值」を支拂はしめたる事によつて置くられたのである。此の「買價」にはアダムの子孫を其の被監禁状態より解放する事に有効なる「價值」であつた。

人類を買ひ取るには如何なる「價值」であるか。それは一個の完全なる人間の生命を必要とするのを必要とする。神の律法は「生命を以て生命を償へ」(申命記十九章廿一節)と指定してゐる。アダムが神の律法を意識して犯した時は、彼は一個の完全なる人間であつた。而して神の律法は、此の罪に対する償ひとして此の完全なる人間アダムの死を要求してゐた。(創世記二章十節)。アダムの子孫を買ひ取り得る「價值」は、一個の完全なる人間の生命であつて、これ以上のもの、又は之以下のものでは其の用を尽さないものである。天使の生命を以て人類を買ひ取る「價值」を使用することを出来ぬ。何故ならば天使は人間よりも本質上「上位即ち大であるからである。又アダムの子孫全部は罪を遺傳せらる事によつて悉くが不完全なる罪人であるが故に一人として此の必要なる「價值」を提供

すうの事は出来ない。(詩篇四十九篇七節)。全人類
は不完全なるが故に唯極めて短時間の間地
上にて生きて後に皆死んで行く。而して若し神
が彼等のため何等か生命を得るの道を備へ
て下さらぬ限り、彼等の全部の永久に死滅し
て了ふのである。然らば人間を死より解放し
その生命への救のため如何なる事が既に行は
れたであらうか。

は天使たちより少しく劣らざれし者即ち死の
苦しみを受けしにありて榮光と尊貴を冠らせ
うむたるイエスを見たり。其の死によるは神の恩
によりて、全ての人代り死を味ひんが烏なり
(ペアル書二章九節)。イエスは常に神の聖意を行は
れた。故にイエスが「^レ天使たちより少しく劣らざれ
し人間、即ち天使よりも下位なる人間となづ
て、死の苦しみを受け、その恥辱的死を受け
て死する最後まで神^アレバに対する忠信を立
て證し、その死によつて人間を死より救ふるめに
必要ならず買價を備るる事は、神^アレバと愛
子イエスとの間に豫め詮解済みであつちに相
違ない。神の愛子の原名はロゴスと呼んだ。

而して口コスは其の最初から神アホバと偕にあり、
神の指揮下に神の御目的を遂行した。口コスは
神アホバの代擧者であつた。此の口コスは一回
の靈者であつた。一人の処女は全能の神アホバ
の奇蹟的力によつて姦め、人の子イエスを生
んだ。(マタイ傳一章十八廿三節)。此の「子」は
その最初より「言ひ」即ち口コスであつた。彼は
その口コスの代行によつて創造されしと聖書は
明示してゐる。(ヨハネ傳一章一十三節)。

人間の救のための基礎が置る始めるらむる時
が到来した。そして神は此の口コスをして一個
の人間として生れしめられた。そこで口コス肉体
となりて我等の間に寄り、われら其の榮光
を見るのは、眞の父の生み給へる。独子の榮光に
して、恩寵と眞理にて満てり。(ヨハネ傳一章十
四節)。果然いども時既に至るに及びて神は其
の子を遣はし給へり。彼はせよリ生れ、律法の下

人イエスは二十歳れ達したる時に、己が全部を以て神上ホバに献身し、神の聖意をなす事を契約した。そしてイエスはヨルグアン河に於てバブテスマを受ける事によつて此の全的献身を表示した。ルカ傳三章廿一セミ節・詩篇四十篇第七、ハ節・マタイ傳三章十六節)。其の時、イエスは一個の完全なる人間として、罪人を買ひ取るに必要なうの貞格の全部を具備してゐた。此の人間イエスが死すべき事に就て彼と其の父なる神アホバとの間に豫めの諒解があつたであらうか。之に就て斯く記さる。『父われを知る如く我も父を知る。我は羊のため生命を棄てん。我が父われを愛す。そは我再び生命を得んがために生命を棄つるが故なり。我より之を奪ふ者なし。我自ら之を棄つるなり。我は之を棄つるの権能あり。再びよく之を得るの権能あり。我が父より我との命令を受けたり』(ヨハネ傳十章十五、十七、十八節)。

死後、死より復活せしめられて、再び生命を回復することは最初から父アボバと此の娘子との間の諒解であつた。イエスの死は、「アダムの生命が禁せらるる如くに、その生命が禁じられただのであるからだ。」イエスは父アボバより受けたる神命に全的に服従して己が生命を自発的(?)棄て、後に再び之を父より受けたのである。神アリストとの間の契約を実行するためには、イエスを死より復活せしめて、之に靈者としての生命を典へ給ふ。〔ペテロ前書三章十八節。使徒行傳三章廿六節・コリント前書十五章三、四、廿節〕。その人間としての生命權を禁じられたイエスは、死より甦らざれども、そして此の生命權を依然として所有してゐた。そして此の生命權は、依然として使用さるべきものであつた。神アボバはイエスを死より復活せしめたる時に、天地全宇宙の全權力をイエスに與へ給ふ。即ちアボバはイエスを以て御自身の大執行官に任じ、天地全宇宙の全權力をイエスに與めを執行するに必要な全權能をイエスに授け給ふのである。(マタイ傳廿八章十八節。ピリピ書二章九—十一節)。イエスは天に擧げられ、

時々己が人間性生命の價值を天に在す神ア
ホバの聖前に提出した。而して此のイエスの人
間性生命の價值は、神にてて祭せられなる
アダムの生命に全く匹敵相當するものであつて
之は罪のためのイエスの祭物として神アホバ
によつて受け容れられた。即ち之は「買價」と
してイエスにより罪人のためを提出されたのであ
る。神は又此の事を、荒野の幕屋に於て行
はれたる祭物の模型模図の中へ強調して置
かれた。ペレビ記第十六章を見よ。『贖罪の
日』に行はれた豫言的模図は斯う示してゐる。
即ち、此日、疵なき一頭の牡牛が、幕屋の
庭に携へまわられて、其處で屠られる。此の牡牛
は人イエスを代表し、又その殺されたる庭
は此の地上を代表し、牡牛の血は、模型的
祭司の手で幕屋の「至聖」の中に携へ入れられ
て後、「贖罪所」の上に注がれた。(ペレビ記十六
章十四節)。此の牡牛の血は人イエスの生命の
血を、代表したのであつて、之は罪の爲の祭物
として流し出されたのである。(イザヤ書五十三章
十節)。幕屋の「至聖」は天界のものを表
象し、イエス・キリストは此処現はれて、己が人

間的生命権をアダムの子孫のための買値として提供したのである。ヘーネル書九章三一廿五節。昔、荒野の幕屋^{カマツカ}於て、毎年一回「贖罪の日」に献げられたる犧牲の祭物は、後日イエスが己^ヒが人間としての生命を、人間に対する買賣價として献げたる彼の仕事^{ハシゴ}を豫表したものである。此の模型即ち模団と之の実体に就て斯く記さる。此の如く之等のもの既に備はり、祭司^{カミコ}等は常^{カニ}前^{カモ}の幕屋に入りて祭をなせり。奥^{カミ}なる幕屋^{ミカミヤ}（至聖^{ミカミ}）一天を表象す^{カタニ}は祭司の長^{カミコ}のみ年^{カニ}一度へりと、血を携へずしては入ることなし。これを^{カニ}と民の過失のため^{カニ}、神^{カミ}と天^{カニ}に在るも^{カニ}の^{カニ}祭牲^{カニ}をもつて潔めらるべ^{カニ}から^{カニ}天に在るものには心^{カニ}す^{カニ}等^{カニ}をもつて潔めらるもの^{カニ}の^{カニ}犧牲^{カニ}をもつて潔めらるべ^{カニ}ため^{カニ}神の前^{カニ}はれんとてより永く我等^{カニ}すのため^{カニ}神の前^{カニ}はれんとて眞実^{カニ}の天^{カニ}に入りぬ。また彼は祭司の長^{カミコ}に他の^{カニ}の^{カニ}血^{カニ}を以て聖所^{カニ}に入る如く屠^{カニ}業^{カニ}已^{カニ}を獻ぐる事^{カニ}をせず。若し然う^{カニ}ば彼は世の始より此の方^{カニ}辱々^{カニ}被^{カニ}難^{カニ}を受^{カニ}くべきなり。然則ど己^{カニ}を屠^{カニ}業^{カニ}とな^{カニ}て、罪^{カニ}を除^{カニ}か^{カニ}が^{カニ}ため^{カニ}今

此の世の末に一度贖はたりてアル書九章六
セ、廿三一廿六節)。斯く神の大祭司長なる大
靈者イエス・キリストは天界に贖はれて、己が人間
的生命権を人間に与する買價としてアホバによ
る聖前ムカシに提出した。此の買價はアホバによ
つて受納された。そしてキリストイエスはアダム
の子孫の中をアホバの此の赦の道に喜び進
んで服從する。人間全部の所有者となつたの
である。斯くアホバは人間の赦のためにはキリ
スト・イエスによつて心の基礎を置き給ふた。
而して之以外は人間の救はる道は絶無である。
人イエスの生命の血は人間に与する贖價で
ある。神が其の律法の中ではそれは凡ての肉の生命はそ
の血なるはなり(レビ記十七章十一、十四節)と声
明し給へる如く、その如く人イエスの生命の血は
最も重なる價値であるつて、イエスの之を以て罪人
を贖つたのである。日本語の聖書中「贖ふ」、「贖
赎へり」、「贖ふ」、「贖罪」、「贖價」等の翻訳されてゐる字は常に同一の意義を有して
ゐるのでない。時に「救ひ出す」又は「救」
等の意味も含まれてゐる。而して此の事例共

訳聖書に於ても同様である。

上記テモテ前書二章六節「^{アヘン}贖價」(改訳)

訳されるギリシヤ原文字は「アヘン」(アヘン)である。あつて、此の原字が聖書中に使用されてゐるものは此の外一ヶ所のみである。此の字は「一の生命を贖ひるために他の生命を以てする」場合に使用される「贖價」はそのものを意味してゐる。即ち彼は己を缺へて、全ての人(神が救はなし給か所の人々)第四節)の贖價となり給へり(改訳テモテ前書二章六節)の「贖價」がそれである。又アダム自身が贖價は與るといふ事を意味するに非ずして、曾つて一度完全なる人アグムの所有し居たりし人間的完全性、即ち、アダムが己の意識的不従順によりて禁ぜられたる所のその生命権が、アダムの子孫のために買ひ戻されたと言ふを意味してゐる。アダムの人生る所はアダムの罪の故によりて此の生命権を受けう事を阻止されてゐた。アダムの子孫中、彼等を買ひ取るために神が設計し給へる方法を受け入れ、之を開いて神の定め給ひし方則に進んで一致する者のみが此の贖價の利益に與かることが出来る。イエスは己自身の

生命の血を以て、アダムの子孫中の上記救はる者の方ために生命権を贖はれた。即ちその生命権を買ひ取られたのである。神は全ての人が此の眞理の知識を得て、神の設計し給へる示命の方則に一致して此の恩恵に浴せん事を欲し給ふのである。即ち善き事ゆて示命の救は主なる神の御意に適ふことなり。神は凡ての人の救は主へ公平なるアホバの備へ給ひし此の贖價を受ける事によつて、真理を悟る(即ち彼等が断へず正しき道を歩むことを我等の救は主なる神の御意に適ふことなり)。神は唯得るためには至らん事を欲し給ふ。それ神は唯一なり。また神と人との間の中保ち唯一にして、人なるキリスト・イエス是なり。彼は己を廻へて、全ての人の贖價となり給へり。時到れば誰せらる(改訳テモテ前書二章三十六節)。神は此の御恩み深き準備を人間の救のため設計せらる。而して使徒パウロは之に附加して言ふ、「我は之がために立てられて宣傳者となり、使徒となれり」と。

人イエスは、父なる神アホバの聖意に服して、己が完全なる人間としての生命権を一つの「價值」に変じた。而て此の「價值」が、アダム

の罪によつて禁じられたる生命権即ちアダムの罪のため其の全子孫が有する事の出来ないくなつた生命権を買ひ戻す「贖價」となつたのである。之はアダム自身が買ひ戻されたといふ訳ではなくて、唯アダムが曾つて有し居たりし権利の全部が買ひ戻されたといふ事を意味してゐるのである。イエスを此の地上に遣はしてアダムの身替りに永遠に死せしめ、之によつてアダムと其の子孫の全部で永久の生命を得させしむるといふが如きはアホバの聖意ではなかつた。人間は一個の人間としてその生命を自ら棄てたとしても、イエス自身が「我があ父我を愛す。それは再び生命を得んがため」此の命令を履行したり(ヨハネ傳十章十七)と声明せる如く、後に再び其の生命を取得したのである。イエスは己が生命即ち生存状態を再び取得したが、然しそれは再び一人の人間としてではなくして、一個の靈魂としてであつた。それと同時にイエスは一個の人間としての生命権を悉く所有してゐた。何故なればイエスの人間としての生命権は禁じられてゐるが

「私からである。神アホバはイエスを靈者として死より甦らせしめた。そしてイエスは一個の人間として生命権を所有してゐた。此の「價值」は神アホバの求め給ふ價格とて神の支拂つたものであるが、之によつてイエスは、アダムの子孫中アダムの如きの靈魂の全部が買ひ戻された。彼等はアダムの如きの靈魂を喜び受け容れる者の所有主となつたのである。然る後イエスは、アダムの子孫を罪と死の囚はれから解放即ち救ひ出され事が出来た。彼等はアダムの罪によつて生命権を禁ぜられて、此の罪と死の中に囚はれたのである。此の事は即ち此の贖價の犠牲はアダムの子孫中の此の靈魂者利益となるためには有効となるのである。例へばアベルは一個の靈魂者として王ホバの御承認を受けたが、然しこの贖價がイエスによつて支拂はれて、それがアホバに受納されるまで生命権を受ける事が出来なかつた。此の贖價の支拂はれる遙か以前に

殺害されし彼は、神が彼を死より甦らして此の贖價の利益を全的に受けしめ給ふ御豫定の時至るまでは死の状態下に待つてゐなければならなかつた。イエス・キリストがその完全なる人間としての生命の價値を主拂ひ、アダムの失ひし所の彼の生命權を買ひ取つた時、イエスは人類中の服従者の所有主となつた。イエスは其の死によつてアダムの身替りとなつたのではなくして、唯アダムが失つた所の生命權と同價格のものを主拂ひか事によつてアダムの子孫を買取つたのである。此の故に人イエスが自ら棄てたる彼の生命は、完全なる人アダムの生命に匹敵する同等價格の價値であつた。イエスはアダムの子孫の有資格者のために生命權を買ひ取つた。そして神エホバの聖意と一致して之寄の者に生命を通じて賜ふることとはイエス・キリストの有する。『永久の生命は、我等の主イエス・キリストを通じて賜ふ神よりの賜物である』(ロマ書六章廿三節)。然らばアダムの子孫中の有資格者を決定し得る者は誰か。それは神エホバより此の事に就ての全權威を受けたる主イエス・キリスト御自身である。キリスト・イエスは永

斯く告げ給ふ如れ歟(エホバ)我に賜ひ一所の者にわれ永久の生命を與へんがため、全ての命を治むる權威を我に賜ひなればなり。永久の生命とは、唯獨りの眞の神なる歟と、其の遣はしレイエス・キリストを知るこれなり』(ヨハネ十七、二三)神と主イエス・キリストを知る事を拒絶する者は生命を受ける事が出来ぬ。多くの人々は此の眞理が示され、人々の故のため設けられある神エホバの御準備が示されたるに拘らず此の真理を拒絶して言ふ、「自分だけ全然興味なし。自分は今ままで充分に満足してゐる」と。アダム自身生命を受くべき理由はない。何故なら彼は意識的の罪人であるからである。それと共に又、人間に生命を與ふるために神が設け給ひ一御準備を聽く事を故意に拒絶するアダムの子孫の中の或る者が生命を受くべき理由も絶無である。若し神エホバがアダムに対しても贖價の恩惠を與へらる事となると、それはアダムの上位下されたるエホバの審判が正当でなかつたと云ふ事を意味す。一方聖書は明示す、「正義は神の寶座の基である」(詩篇八十九篇十四節)と。神の此の御準備を排斥拒絶す

遠の父即ち「生命的の授與者である。(イサヤ書九章六節)。主イエスは一の父とて、神エホバの聖意に一致して死者を生命の状態に復活せしめ、多くの者に生命を授くる權能と權威を保有し給ふ。イエスは此の生命をアダムの罪のために其の生命權を失ひたる者のみに而して之等の人々の中でエホバの設け給ふ方則に服從して歩む者のみに與へ給ふ。

「全ての人」

イエスの曉價は地上全人類に与する永久の益とするのではないか。上記テモテ前書二章六節の聖句は、イエスは全人類のため其の生命を贖價として與へたと示してゐるのでけなりか。此の事は全人類が此の贖價の恩惠に浴し得る保證として然らず。斯かる結論は絶対に誤つてゐる。アダムの子孫なる人類の或る者は意識的の悪人である。而して斯かる者は此の贖價の恩恵に沿することは出来ない。若し彼等が此の贖價に關する神の方則に一致して歩むならばその時に彼等は義人となるを得て、贖價の利益を受けることが出来る。之に就てイエスは、

「買ふし、買ひ取りり」。若くは「贖ふ」と訳されるアダムの子孫に此の贖價の恩惠を與ふる事は、聖書の中で明示される。神の御目的に全く矛盾することとなる。上記テモテ前書二章三十六節の聖句は、『神は偏らざる者』(使徒行傳十六章四節)に在す事を示してゐる。故に此の贖價は、神の聖意即ち律法に服従する全部の人々のための益となるのである。其外にはエホバと呼び奉る唯一の全能の神在りし、又此の神と人間との間には人イエスと云ふ唯一の中間者あり、而して此のイエスは『全ての人』の爲に己が生命を與へてその贖價となした、といふ事は、即ち此の『全ての人』とは神の設け給ひし方則に一致服従する者のみを意味してゐる事が勿論である。此の贖價が全人類に對して自働的に恩恵を與ふると教わる聖句は聖書の中では絶無である。

「買ふし、買ひ取りり」。若くは「贖ふ」と訳される字のギリシャ原字は、アゴリゾムである。此の字は、アゴーラより轉化したものであつて、アゴーラは「集める」を意味し、又其の同種語のアゴリゾムは「市場」を意味して、之は市場に集めること云ふ事の意義である。故に、此の

agorāzoの字は、その実際の意義に於て、市場に行き、賣り物を買ふといふ事である。その一例を舉げて見ると、昔奴隸は市場に於て賣買アーバいた。agorāzoの字は此の事に正しく該当してゐるのである。此の字の使用されれてゐる好適な実例アズガがある。即ち曰アムた、天國は烟アハ隱アヒタれたる寶の如し。人見出さげ之を枕し、喜び歸り、其の所有物を悉く賣りて其の烟アハを買ふなりアハ(マタイ傳十三章四十四節)。多くの人々は此の「烟」の字を解釈して、之は悪人其の他の全部を含む全人類を象徴するアハ主張アハた。斯かる主張は絶対に誤つてゐる。此の聖句が、「また天國は……云々とある。」注意すべしである。此處に持ち出されたのは天國そのものである。地上全人類が此の「天國」の中々含まないのは確実である。又此の「天國」が罪ある人類の中々隠アヒタしてゐない事も確実である。「天國」は隠アヒタたる寶である。それが此處に持ち出されてゐるのである。之は絶対に聖なる神の宇宙的大組織制度の中にある寶である。「天國」は隠アヒタたる奥義である。(エペソ書第一章廿一節。五章世二節)。此の言は歴代屋

關係なくして、イエスは此の苦しみによつて服従する事を学び、神に対する己が貞節と忠誠を立證する事を得て、永遠の救と神の國の嗣子となり給ふたのである。(ペブル書五章十八、九節)。

同じ此の *agorazio* なるギリシヤ語は次の所にも「買ふ」と訳てある。即ち「また天國は、良き真珠を求めんとする商人の如し。一の價高き真珠を見出さば、其の所有を悉く賣りて、之を買ふなり」(マタイ傳十三章四十五、四十六節)。之は上記同章の第四十三、四十四節に示す所の譬と同意義である。之等兩種の譬はキリストの「體」の成員を抱括す。何故なれば彼等は「天國」の一部を形成するものであるからである。若し上記諸聖句中の神の國に關する「賣買」が贋價に關するものであるならば、キリストの「體」の成員は之に全く無關係である。何故なら彼等は人類を買取る事に就ては如何なる部分分にも絶対無關係であるからである。キリストの「體」の之等成員が神の國即ち天国に參與することに就ては一毫の疑ひをき所である。(口福音八章十六、十七節、默示録一章六節、廿章四節)。キリスト・イエスの御蹟を

忠実に追隨して、神の國即ち天国の一部とされ
たる者等は、彼等が御國の一部となる道を
歩み出す前は先づ初めてキリスト・イエスの貴
き血にて買って貰ひ取られたのである。(ペテロ前書
一章十八、十九節)。ヨハネ等の身は、ヨハネが神より
受けたるヨハネのうちにある聖靈の宮にて、ヨハネ
は汝等のものに非ざる事を知らざるか。それはヨハネ
は價を以て買はれたるものなればなり。此の故に
神のものなるヨハネは自身於て神の榮光を現
はずべし。(コリント前書六章十九、廿節)。因みに此
の聖句の「靈魂に於ても」は不正の挿入句にて
原文には無い。(改訳を見よ)。此の聖句は「買は
り立てる者」とてのクリスチヤン即ち受膏者のみ
に適用さう。此の聖句は惡しき者をも含む人
類の全部が「買はれたる者」であると云ふ事を
意味してゐない。買ひ取られたる奴隸が其の主
人の命に服従しないからと云つて其の奴隸は
自由を喫へられて解放されるであらうか。昔埃及
人に於て人々がヨセフとの間に結んだ契約に
注意せよ。其の時埃及人は先づヨセフに来て
パロ(埃及王のこと)の代表者なるヨセフの前に
己等が買ひ取られん事を願つた。此の事は、キ

代隠れたり。奥義存りしが、今其の聖徒に顯現されたり。(ヨハネ書一章廿六節)。キリスト・イエスは、父なる神の聖意に全般的の服従をなして、全部の者の神の嗣子となられたり。此の「全部」の中には此の「隠れたり。奥義」即ち「天国」が含まれてゐる。ペブル書一章二節。ロマ書八章十六、十七節の首都制度即ち神の政府なる「天国」を有する神はイエスに其の御目的を示して、イエスがるべき事を明らかにされり。此の「天国」は「歴代歴代隠れたり。奥義」にて、神はそのを顯示すべき御豫定の時到るまでは何者に対しても此の事を絶対の秘密として隠し置き給ふ。イエスは此の事を学び知つた時、その有するものの全部を賣り拂つて、之の嗣子となり、御國の首都となつた。天國を買ひ取つたのは、人類のあとの贖價として、興へたイエスの人間性生命である。ものではなくて、それはイエスが神アバの聖前に示したうる絶対無條件の信服即ち最大圧迫下に於て神を立證せるイエスの貞節と忠誠、恥辱的死を受くるに至るまで固く持続せらる忠節そのものであつたのである。イエスの苦しみは人類のための贖價そのものには何等り

リスト・イエスに来て己等より買ひ取らん事を求
むる人々が買ひ取られる事を豫示する。一の豫
言的模図である。(創世記四十七章十九—廿三節)。
リスト・イエスの體の成員となる者は、先づ初
めにキリスト・イエスに来て、主イエスと父なるアホバ
の聖意は何事でも之を行ふ事を約束するので
ある。其の時にキリスト・イエスの貿價は彼等の
上々適用されて、彼等はキリスト・イエスの所有に
帰し、最早己等は自身のものではなくなるのであ
る。斯くて彼等は主イエスの僕即ち奴隸となる。
爾後神アホバとキリスト・イエスの聖意をなし、主
の命令に服従するの義務を負ふることとなる。
彼等は「」等の意志に逆らつて買ひ取らぬ者の
ではなくして、彼等は自ら求めて買ひ取られ
たのである。アホバの方則行常れ絶対不変で
ある。

る自主なる者なり。此が如く召されりて自主なる者はキリストの奴隸なり。汝等は價を以て買は
れ迄の者なり。人の奴隸となるる物にヨロ(ヨリト前
言七章、廿二、廿三節)。汝等の者は、彼等が神主
ホバの聖意をうすべく先づ己等自身を主に獻
げざる以前に行召されなかつた。然る後は買
價即ち贖價の効力は彼等の上に働らき、彼
等は買ひ取らじて、主は彼等の所有主となり
給ふのである。斯くて主に受け容れらるる
時に彼等は主の奴隸となる。何故なれば
彼等は自ら進人で主の示し給へる條件に
よつて己等の買ひ取りれる事を承諾したか
らである。彼等は己等自身を王に賣り渡
したものである。(列王紀畧上廿一章廿、廿五節)。
悪き者等は買ひ取れない。〔昔、民(イ
スラエルの民)の中には偽謬言者ありき。其の如く
等は滅亡に至る異端を傳へ、且己を贖ふ主
を主とせずして、速かなる滅亡を自ら取るべ
し(ペテロ後書二章一節)。斯かる者行初めに、
買ひ取らむたるも、後に悪き者と化し、主及
び己等を買ひ取らる主の血の價值を呴詰す

るるのである。斯の如き者には枚の無き事では聖書の明示する所であらう。(ヘブル書六章四一十節。十章廿六一廿九節)。

聖書は又、キリスト・イエスの血によつて買ひ取らるたる忠信なるクリスマッテン即ちキリストの中れ成育せらる。眞の意味に於ける。長老たちも皆聞いて言ふ。この長老たち新らき歌をうたひ言ひけるは、汝(キリスト・イエス)は此の卷物を取りて、其の封印を解くれ。其の血を以て諸族、諸音、諸民、諸國の中より我等を贖ひて神に歸せしめたり。(默示録五章九節)。

此の聖句は愚考者には適用されない。何故なら、此は往々は隕想はれて、神に歸せてめぐらさ

ないからである。此の聖句に因るて、贋體の利益は何である。右に於いても無條件で送入られ居て事を教へてゐる。何故なれば之等の「長老たち」は此處れ「諸族、諸國の中から」贋ひ出されたと示してゐるからである。

キリストの「贋」の成りが贋ひ出されたる旨は、うかがひかの聖句に取ても明らかである。〔彼等新しくまじめの讃美を實座の前及び國の神物

と長毛たちの前に歌ふ。此の歌は贖ける事を得て地より未來る十四萬四千人の外は学び得ることなし。彼等は婦（悪魔の組織制度なる大淫婦バビロン）と交はりて其の身を汚さざる處也なり。且羔羊の行く処何處にても之れ隨ふ。彼等は人の中より贖ひ出されたり。有て神と羔羊に、献げし初めの果なり（默示録十四章二、四節）。

之等の者が「人の中より贖ひ出されし者である」といふ此の事内、即ち人類の全部が無條件にて、而して自動的た贖はれる者に非なる事を示してある。此處に示され乍らキリストの「體」の成員は、先づ最初に神アドバの聖意を了すべく己に自身を神に献げた。此の故に彼等は己等の貪り取らん事を願ひ止めるのである。神の自由的と此の御準備は無差別の人間の全部を贖けんとするのではなくして、神に頼むる者は、先づ最初に神とキリスト・イエスを信じ、然る後に神アドバの聖意をなすべく己等自身を獻けたる者である。それのみならずキリストの「體」の成員は神とキリストに獻けたる「初めの果」である。此の事は之等の者以外にも

主に買ひ取られて、神の聖意をたすべへて自
身を全的れ、献げることによつて、神とキリスト
に忠節を表示する事を許さうる者のあらゆ
を立證してゐる。

"EXAGORAZO"

他のギリシャ語で上記 *agorano* よりも強き意味を有する字に *exegoreutō* といふのがある。此の字は「買ひ戻す、贖ひ戻す、全部を買ひ上げる、全部を獲得す、贖ふ、赦ふ、解放する」を意味してゐる。此の字は人間を贖ふと共に、其の人の過去にまで遡つて之を贖ふ事を意味す。ヨハリスト既に我等のため詛ばる者となりて我等を贖ひ、律法の呪詛より脱せしめ給へり。そば木に懸かる者は詛ばれし者なりと録さばばなし。このアーラハムに約束し給ひて **慰懃** イエス・キリストに由りて異邦人にまで及び、我等にも信仰して約束の靈を受けてあん爲なり。(ガラテヤ書三章十三、十四節)。不従順なる猶太人は律法の呪詛から贖はれなかつた。それと同様に不従順なる異邦人も呪詛即ち罪の囚はから贖ひ出されないものである。我々等も信仰によりて約束の靈を

受けしめんためなら」とは即ちクリスチャント自ら進んでキリスト・イエスを信じ、主イエスの福音を追隨する者である事を示してゐる。猶大人の大祭司數は律法の呪詛の下に留まつた。又斯く記さる。『然山ども時既に至るに及びて神子の予を遣し給へり。彼は女より生れ、律法の下に生ひたり。こり律法の下にある者を贖ひ、我等を一して子とする事を得しめんが爲なり』(ガラテヤ書四章四、五節)。此の聖句を見ると、『子をたる事を得しめしらむを猶太人のみが贖はれたる事が明らかである。之と一致して聖書は又斯く示す。『かれ(イエス)己の國に来りしれど其の民これを受けざりき。彼を受けり、その名を信せし者は權を賜ひて之を神の子となせり。斯かる人は血統の由るに非ず、情慾の由るに非ず、唯神に由りて生れたり』(ヨハネ傳第一章一一十三節)。

書五章十六節。永井氏訳)。此の「期を贖へ」とは「機会を窺つて之を活用せよ」との意味である。

ギリシャ語の *λύσθει* は單に「解き放つ」を意味するが、此の字は次の二聖句に「贖ふ」と訳されてゐる字の原語である。即ち「我等イスラエルを贖はん(λυτρόν)者は此の人なりと望みたりし。又そののみならず之等の事の成りしより今日は寧三日なるべし」(ルカ傳廿四章廿一節)。これは汎等贖ばれ(λυτρόν)て、先祖より傳はりたる虚^せき行為より離れて、銀や金の如き壊るものにて由るに非す。疵なく、汚なき羔羊の如きキリストの貴き血にて救はることを知ればなり(ペテロ前書第一章十八、十九節)。

此の後者の聖句は、惡魔の網羅撒但度より脱して、ヨリ下ト。イエスに在りて神示ババに信服せろ者等のみに向つて發して山てゐる。更に又ギリシャ語の *λυτρός* の字が、「贖ふ」又は、「價を拂つて賣ふ」の意味に於てかみ聖句の中に使用されてゐる。主なるイスラエルの神。讀むべきかな。これ其の風を顧みて、贖ひ(λυτρόν)

に正しく、此の「すくひ」は昔イスラエル人が埃及から救ひ出された時の「救ひ」と同様のものである。(出埃及記六章六節・十五章十三節・詩篇六篇九十一節)。それと共にキリスト・イエスの之等追随者は悪魔の組織制度即ちバビロから解放されてゐるのである。一九一八年以後神の組織制度の裔の遺残者は、主の聖子に沿つて悪魔の組織制度から解放されて救ひ出されたのである。(詩篇百七篇二、三節・イザヤ書五十二章九十一節・エレミヤ記世一章十一節) 即ちイエス・キリストを信するに由りて、其の義を神に見ての信者に賜ひて区別なし。そは人皆既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、唯キリスト・イエスの贖ひによって神の恩を受け、功なくして義とせらるゝなり』(ロ馬書三章廿一廿四節)。此処にも亦、「贖ひ」はキリストを信する者のみに適用されてゐるのであって之等を信する者は其の結果として義とぞいふ事が明示されてある。之等の者は罪と死の囚はより解放された者であつて、此の解放は他の者には與へられないものである。

此の Apol. 10: 13 の字は次の聖句に「救は

此の Apol. 10: 13 の字はエペソ書一章七十四節にも使用されてゐる。『その恩の豊かななる所ありて、彼(イエス)にあるが等は其の血により贖ひ即ち罪の赦免を得るなり』、『神聖靈をもて印し給ふは、其の買ひ受けし者を救ひ、且己の栄光を顯はさんをめなり』。尚この第十四節の『間ひ受けし者』のギリシャ原字は、アガボス(アガボス)であつて、此の字はスペテロ前書二章九節の『神に屬ける者』とて表はされてゐるが、此の『買ひ受けし者』とあるはキリストの「體」の成員を意味するのであつて、他の者を意味してゐない事は勿論である。エペソ書一章十節の『贖ひ』と試し、又第十四節に『救ひ』と試したる此の Apol. 10: 13 の字は、救を得る唯一の道なるキリスト・イエスの血を信じて罪の赦免を得て神に服従する者の之を適用されてゐるのである。悪魔の組織制度の崩壊する時、之等の買ひ受けし者は完全なる救を得るのである。

又斯く記する。『然等行其の子によりて贖ひ即ち罪の赦免を得るなり』(コロサイ書一章十四節)。此の『贖ひ』云々誰でも無條件に與へ

れる」と訳されてゐる。『唯之等の者(ヨハネ二級即ち「他の羊」級の者)のみならず聖靈の初めて子となり人事即ち救等の體(單數)の救は結べる點を有てる故等も自ら心の中に歎きて子となり人事即ち救等の體(單數)の救はれん事を待つ』(ロ馬書八章廿三節)。此の『我等の體』の『體』の字は單數であるが、之はキリストの『體』の全成員なる十四萬四千人の者を意味し、その「都」なるキリスト・イエスと共に忠信者が一九一八年に悪魔の組織制度から救はれてゐた事にて行はれた。彼等は此の一八年来惡魔の組織制度の中の『俘虜囚人』と名づてゐたのであつて、此の年に主イエスは神の宮に臨みて忠信者を御許し集め給ふたの神の福音に記さる。『イエスは神々立てられて、諸等の智恵、また義、また聖、また贖ひとぞり給へり』(ヨリント前書一章卅節)。此の聖句が、キリスト・イエスを通じて與へられる神の救の御準備を排斥拒絶する者に適用されざるは勿論である。

を典へんがためなり（改訳マタイ傳廿章廿七、廿八節。マコ傳十章四十四、四十五節）。此の「アダムの子は代りし、代償し、この爲に」等を意味す。イエスは己が生命を多くの人「の爲に」して贖價として與へられた。イエスは之等の者のために彼等が神の設け給ふ救の方則に服従一致するといふ事を條件として、彼等のため完全なる生命權を買ひ典へられたのである。イエスが意識的悪人を救ふたに其の生命を典ふべく未だらのをない事は勿論である。成る程ロマ書五章ハ、十節にて、我等が未だ敵であつた時にキリストが我等のため死に給ふと記してゐる事け事実である。即ち「然れどキリストは我等の尚罪人たる時に我等のため死を給へり。神は之よりて其の愛を顯はし給ひ。」若し我等が敵なり一時に、其の子の死によりて神に和解ことを得たうには、況て和解を得たる今も生けるに頼りて救はる、ことを得ざらんや。召を蒙りて聖徒となれる者「を意味してゐるのである。（ロ馬書第一章七節）。

約せらる者のみに典へられる事を明示してゐるのである。此の中保たるキリスト、イエス近くては何人も神アホバと和解する事は出来ぬ。イエスは御自身の血即ち生命を以て人類を冒の取り給ふた。そこで此のイエスは、自ら進んで救はれ人事を望む者のみを罪の不完全なる状態の下より解放し給ふ。

神アホバはアダムの子孫である罪人に対してその御憐憫を示し給ふ。之を即ち神の御仁慈の結果である。故に聖書は示す、「されば神は其の生み給へる独子を賜ふ程に世の人を愛し給ひ」。此は凡て彼を信する者に滅ぶることなくして、永久の生命を受けしめんが爲なり（ヨハネ傳三章十六節）。キリスト・イエスを信する者のみが滅亡より救はれるのである。神の其の子を世に遣はし給へるに、世を審判かんと非ず。彼の由りて世を救はんが爲なり（ヨハネ傳三章十七節）。之を即ち人々が救はれん事を求め給ふ神の御憐憫の顯示である。然し之は人が自ら欲すると否と拘らず衆々角全部が救はれるとのふ事を意味するのではない。

人は贖價なくして救はれない。何故ならば

彼はアダムの罪を遺傳せる罪人であり、而して罪人全部の「には」神の怒即ち神の正しき審判による断罪の判決が降つてゐるからである。神は不完全なる者を承認し給はず。此の神はその御仁慈を行使して、イエスをして人々を買ひ取らしむる方法を準備し給ふ。人が神とイエス・キリストを信じて、其の信仰を実行する時、彼は罪の囚はより解放され、神に対して個人的にその貞節を立證する機会を典へらる。彼はその事をなす時、イエス・キリストを通じて生命への救を得るのである。故に聖書は明示す、「父は子を犠牲して萬物を其の手に授けたり。子を信する者は限りなく生命を得る」と云ふのである。神の怒はざる者は生命を貰ふ事を得じ。且つ神の怒はざる者は生命を貰ふ事を得じ。且つ神の正しき刑罰であるかの死滅より免がれる事は出来ぬ。此の故に贖價の恩惠は如何なる人に對しても無條件で典へられるといふ教は绝对に非聖書的である。

「贖價」とは人類を買ひ取るために備へられたる貴重なる價值であつて、又は完全なる人ア

テモテ前書はテモテに宛てたる書簡である。此のテモテは、神の聖意をなす事を既に契約せらる者等を教へるための仕事を持びて遣されたのである。之等の者の中にはエホバの聖名のために此の世より特選せられたる者の含まれてゐる事内勿論である。使徒パウロの此処に言ふところを約言すると即ち斯うである。「神は人を偏り親しみ、人々との間に唯一の中保として人キリストイエスの在す事、而して此のイエスは神を求むるところの全部の人々のための贖價として御自身を存すべく先づ契約せる者のための中保となり給ふ。以上列舉せる諸聖句は共に一致して、イエスの贖價は、之を好むと好まざると拘らず如何なる人々も絶対無條件で其の價值を典へらるる」と云ふのである。之は先づ正義を求めて神アホバを信じ、又ホバが唯一の全能の神に在す事とキリストイエスが救の道である事を確信して、自ら進んで神の聖意を存すべく禱

ダムが己自身から取り上げられ、而して己が全子孫の興へ得ざりしも又は全く匹敵する價値である。

「罪祭」とは、此の「買價」即ち贖價の價値を神アホバハ提出して支拂ふことを謂ふ。イエスは地上で死んだ。イエスの生命の血は贖價として注ぎ出された。神はイエスを靈者として死トヨリ甦らて天に舉げ、神の御目的を執行する全權能をイエスに與へ給ふた。神性の大靈者キリスト・イエスは天に於て此の「價値」即ち己が人間と一との生命權を罪のための祭物として神アホバハ提出し給ふた。之を即ち罪祭である。「贖ふ」といふ行為の中には、その買價即ち贖價を準備する事と、その買價を提出即ち支拂ふことの全部を含んでゐる。此の買價を準備して、その血を支拂ふ事の全部は、神アホバの聖意に一致服從せしイエス・キリストのみによつて完了すまじきのである。此の故に主イエスのみが此の事を行はれたのであつて、その「體しあ成員」は此の事には全く無關係である。

昔、荒野の幕屋で行はれたる『贖罪の日』に於ける豫言的模範は、此の新論の正当なる事を全般に立證してゐる。人イエスの模型であ

左の牡牛は、幕屋の庭の中へ擣へまくれて、其
外で屠られたり。此の庭は、イエスが殺さる所也。此り
地上を象徴した。此の模型はがてイスラエル
の祭司長は、その牡牛の血を、天を象徴す
る至聖所の中に携へ入り、キリスト・イエスの生
命を象徴する其の血を其處に注いだ。此の豫
言的模図の此の部分の豫言の成就されたて、
大祭司長ナシト・イエスは実際の天に昇り、
其の「價值」即ち己が人間としての生命權を
神に手入れ支拂はれたのである。模図に於て、
此の血は祭司長によつて「贖罪所」の上に七
度注がれた。『七』の數は天界に於ける全部
又は完全を象徴す。此の事は此の血即ち主
ス御自身の生命の血が天に於て完全に注か
れた事を意味するのであつて、即ちイエスは人
類のため、その「買價」の全部を支拂ふことを
を完了されたといふ事を示してゐるものである。
〔レビ記第十六章を見よ〕。此の模型はがて祭
司長は單身の至聖所の中に入り、他の二者の
彼と共に入れる事を許さなかつた。

ることなし。これ己と民の過失の爲め獻ぐるは
リ也(ヘブル書九章七節)。彼(祭司長)が聖所に
於て贖罪を行さんとて入りたる時は、その自己
と己の家族(祭司級の者)と、イスラエルの全會
衆のため贖罪を行つて出づるまでは、何人も
集会の幕屋の中に居るべからず(レビ記十六
章十七節)。その如く実体に於て大祭司長
キリストイエスは其の人間としての生命の價值
即ち「買價」を、神の選び給ふ王族及び人
人の罪のために提出されたのである。(ヘブル書九
章十七、廿四節)。

教会即ちキリストの「體」の成員は彼等が
祭物を行すとの理由によつて、此の「罪祭」
に參與する稱せられ、此の事を支持する
證據としてたの聖句が使用されてゐた。斯
くて又、民の爲なるその罪祭の山羊を屠
くり、その血を障蔽の幕の内(至聖)に携へ
かの牡牛の血をもてなせし如く其の血をもて
なし、これを贖罪所の上と、贖罪所の前に注
ぎし(レビ記十六章十五節)。

此の聖句にも、又他の如何なる聖句に
してもキリストの「體」の成員が如何なる形

式に於ても罪祭に參與するといふ事を絶却示してゐない。此の旨重なる「價值」即ち「買價」はイエスの生命の血のみであつて、之が罪祭として提出されて支拂はれたのである。然らば何故に「アホバの鳥の山羊」が祭物として屠られて其の血が注がれるのであらうか。『卫ホバの鳥の山羊』の血が、牡牛の血によつてなまかたと同様に「至聖」の中を拂へ入山らむて注がれたる事内事実である。模型に見るに、山羊はそれ自身が己を犠牲の祭物となるものではなくて、之は祭司長によつてなされたのである。之の實ゆに於て、人間は一人として己自身自ら祭物となるのではなくして、大祭司長なる主イエス自ら此の祭物をなし給ふのである。「アホバの鳥の山羊」が祭物となり、之の血が注がれる事の意義は即ち射うである。『天の召命』を蒙りたる人々皆彼等が天からてキリスト・イエスの榮光に参加する前提的條件として先づキリスト・イエスの上に落つる誹謗を共に受け、イエスと共に苦しめ、イエスと共に死ななければならぬ事となつてゐる。之に就て使徒は靈道下に斯く言ふ。今

われ辯等のためて受くる。苦しみを喜び、又わが肉體をもそきリストの體即ち教会のためて其の患難の説いたる所を補ふ(福音書一章廿四節)。此處に信すべき詔あり。我等若し忍ばざば彼と共に死なば彼と并に生くべし。我等若し忍ばざば彼と共に王となろべし。我等若し彼を知らずと言ひ、彼も我等を知らずと言はん(テモテ後書二章十一、十二節)。『辯等の召されたるに之がためなり。そはキリスト辯等のためて苦しみを受け、辯等をして己の跡を隨はしめんとて模範を辯等に遺し給へばなり』(ペテロ前書二章廿一節)。此の模型に於て「アーヴバの鳥の山羊」は、靈によつて生れたる者等を代表す。之等の者は、彼等が神の國に於てキリストイエスに参與し、神性の靈者としてイエス・キリストと共に支配の大權に參加せんためには、先づ人間として死ななければならぬ。『汝將等は死に至るまで忠信でなければならぬ。』辯等の者は死に至るまで忠信でなければならぬ。『汝將等の中の者を牢獄に入れて辯等を詰めんとする。』辯等十日之間患難を受くべし。辯死に至るまで忠信なれ、然らば我生命の冠を辯に與へん(福音書二章十節)。『皆生きてキリストと

共に千年の間王となれり。」(新約聖書マルコ福音書四節)。以下この結論は首尾一貫してゐる。即ち神が人間には神の子キリスト・イエスを由つて救を準備し始ふた。流されたる人イエスの血は罪人のための「買價」である。此の「買價」即ち「贖價」はアダムが己の子孫のために失つた所の全部を買取つた。此の「買價」は主イエス・キリストが信ずる者等のための「罪祭」として天からアホバの聖獻に提出されて支拂はれた。此の事の全部は、アホバの聖意に服従せるキリスト・イエス・キリストは全じた。此の贖價を支拂つたイエス・キリストは人類の所有者である。而して此の事を信じて神とキリストに服従する者の全部が此の贖價の利益に歸かるのである。永久の生命とは、我等の主イエス・キリストに由つて賜はる神アホバの賜物である。何故なれば救は神アホバに屬し、キリスト・イエスは此の救を傳達する爲に用ひられるアホバの器である。からである。此の外に永久の生命を得るの道は絶無である。人は神アホバと主イエス・キリストを信じ、神の聖意をなすべく絶対無條件の献身をして此の救を頼じ求めざる限り何人と雖も永久の生命を得ることとは絶対に不可能である。(註一 一九三九年五月十五日)

(卷之六)

昭和十四年六月十三日印刷
昭和十四年六月十六日發行

〔非賣品〕

東戸古移坐区
日月
五八

沙縣志卷之四 / 五八

印 刷 所

燈臺社印刷部

390
72

390
72

終

